たまのよこやま

発行
(財)東京都生涯学習文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
多摩市落合1—14—2
☎ 042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報 No.50 平成12年10月30日 http://www.tef.or.jp/maibun/

汐留遺跡現地説明会風景 平成12年10月8日（日）

「江戸遺跡」発掘の10年

調査研究部長 佐藤 攻

多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査を専らとしていた東京都埋蔵文化財センターは、平成の世になってから「江戸遺跡」にからむ開発事業の発掘調査を手がける話が発生しました。自衛隊市ヶ谷駐屯地（防衛庁移転予定地）、旧東京都庁舎跡地（国際フォーラム建設予定地）、旧汐留貨物駅跡地（汐留土地区画整理事業地）などの大形の開発事業に伴う発掘が、平成三年度から次々とスタートすることになり、現在も発掘調査が継続されています。

市ヶ谷地区は、「尾張藩上屋敷」のほぼ全面を発掘することができました。都庁跡地区（丸の内三丁目遺跡）では、「阿波藩蜂須賀家」「土佐藩山内家」の上屋敷と元禄の大火以前の小大名の屋敷跡が「大名小路」に面して発掘されました。汐留地区は、「龍野藩脇坂家」「仙台藩伊達家」の上屋敷と「会津藩保科家」中屋敷のほぼ全域の調査が行われました。江戸初期の大規模な屋敷地土地造成工事（土留め柵）や、建物の基礎、屋敷内の庭園や内庭、海から資材等の搬入のための「船入場」、木樋・竹樋などを利用した上水施設、また、地震の痕跡としての噴砂や砂脈が確認されました。あわせて、江戸時代初期から幕末にかけての多くの生活用具が発見されています。

「江戸遺跡」の発掘調査を手がけることは、当センターにとって大きな課題でした。発掘の手法・整理報告書の纏め方について現場を担当する職員の試行錯誤の毎日が続きました。記録に残っているものの検証、記録にない遺構や遺物についての確認と復元を続ける中で、調査手法の確立など、センターとして一定の方向性を示すことができたと自負しております。

遺跡だより㊿

武蔵国分寺跡遺跡北方地区

今回は多数の遺構・遺物が出土した縄文時代早期末（約6500年前）の様相について紹介します。

本遺跡は武蔵野台地を流れる小河川の一つで、武蔵野段丘と立川段丘とを画し、国分寺崖線に沿って東流する野川の源流域に隣接しています。やがて多摩川へ合流するこの川の流域には縄文時代中期の大規模集落が数多く営まれました。

崖線は通称ハケ(崖・峡)と呼ばれ、ハケの礫層から湧き出る清らかな湧水は縄文人に豊かな水資源を供給し、生活に適した環境を提供してくれました。

こうした条件を反映して本遺跡からは縄文時代草創期～晩期までの遺構・遺物が出土し、縄文人の活動の痕跡が多くみられます。

約5万8千㎡に及ぶ広大な調査区には各時期の環境変化に応じて土地活用をした縄文人の柔軟な姿勢が見て取れます。

調査区東端は恋ヶ窪南遺跡に接しています。この遺跡は野川源流の湧水帯を北側に臨む台地上の末端部に立地しています。

遺跡調査会の幾度かの調査では、早期末の集落跡や中期初頭の住居跡が検出され、南北150m、東西250mの規模があります。遺跡の全体像は未だ不明ですが、今回の調査で早期末集落の西側地域の範囲がほぼ確定しました。

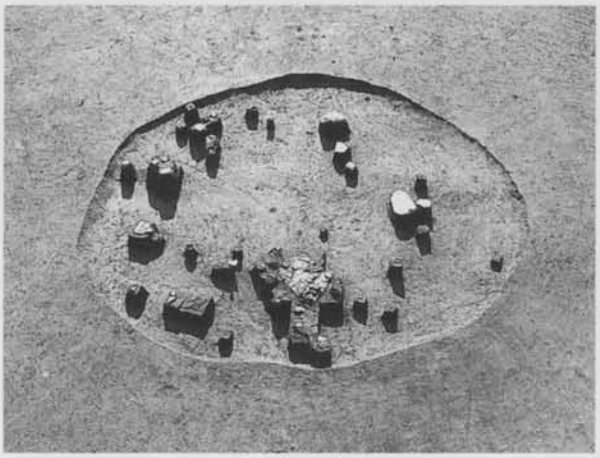
調査区東端は居住域と考えられ、50軒以上の竪穴住居跡と竪穴状遺溝が濃密に分布しています。周囲には、南北に円形の土坑が50基ほど弧状を呈するように分布していますが、この土坑群を境に遺物は極端に少なくなり、遺溝は全く見られなくなります。また、円形土坑群は本調査区域のみから見る限り、あたかも環状もしくは馬蹄状集落の外帯を意識して構築されたかのようです。

3基の円形土坑について土壌分析をすると、このうち2基から高い濃度のリンが検出され、分析者は墓である可能性が高いと報告しています。しかし、この結果は判断材料の一つに過ぎず、集落構成については今後なお検討すべき課題を多く残していますが、遺物の量から見ても南西関東屈指の遺跡であることには変わりありません。

ほぼ同じ頃の集落遺跡としては武蔵野台地の北縁に位置する埼玉県富士見町の打越（おっこし）遺跡が著名です。

この遺跡は、縄文海進期にできた奥東京湾の支湾である古入間湾の入り江に面しています。水深は浅く、干潟が発達し、沿岸の台地には早期～前期にかけて多くの貝塚遺跡が残されました。この時期の集落はこうした海産資源に恵まれた海岸近くにその多くが営まれました。

打越遺跡から出土した土器はアカガイやサルボウなどの2枚貝の縁を駆使して山形や菱形などの幾何学的な文様を描き、形は底のやや丸い土器で、打越式と名付けられました。本遺跡の土器も文様は似ていますが、打越遺跡のものが比較的簡素であるのに対して格子目状の文様や、粘土紐を器周に巡らせた、やや異なった文様をもっています。


早期末竪穴状遺構

かつては神奈川県や静岡県東部を中心にする打越式と同時期の地域差として捉えられていた土器群でその北限は多摩川あたりと考えられていたものです。ところが本遺跡ではかつてない土器量が出土しているにも関わらず本来の打越式は全くと言って良いほど見られません。周辺の遺跡からは打越式の出土が知られており、地域差と考えるには矛盾する現象です。

また打越遺跡と同様に東海地方から運ばれたと考えられる土器が多数出土しています。これらの土器は、極めて薄い作りで一見して在地の土器との区別が容易です。壊れやすい土器が100kmを越えて運ばれた理由については諸説ありますが、未だ明確な回答は得られていません。

現在接合作業の最中にあり作業が進めばさらに多くの情報が得られるものと思われます。（中西　充）

文献調査で掘り出すもの

江戸時代の遺跡では、考古学の調査に伴い関連分野との共同研究がなされます。その中で、当時の文字や絵図史料を調査する、文献資料調査も行われています。

現在調査中の防衛庁の区画は、明暦二年（1656）から明治四年（1871）まで尾張藩の上屋敷があった所です。

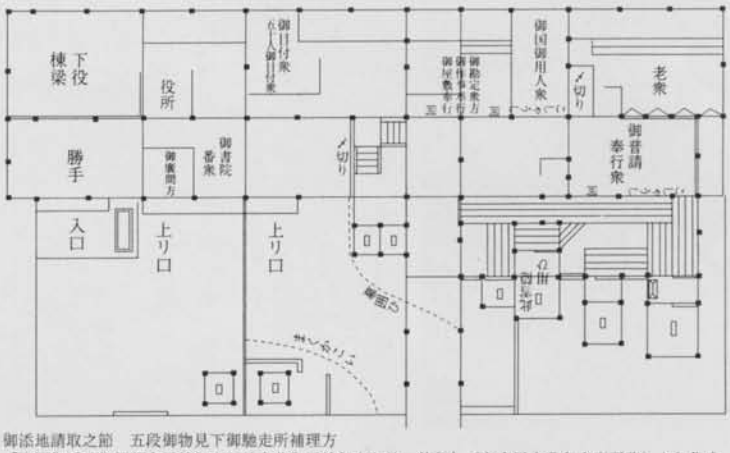
文化財講座 〈40〉

大江戸掘りもの帖～十七～

当初は、凡そ六万七百坪の屋敷地でしたが、明和五年（1768）に、西側に凡そ三万坪の拡張をしています。この拡張を当時の言葉で、「添地拝領」といいます。

この添地部分には、広瀬藩の上屋敷（凡そ四千四百坪）をはじめとして、旗本・御家人などの屋敷地がありましたが、尾張藩は、彼らに引越移転料（「御手当金」）を渡して引越しをしてもらいます。江戸時代、武士の暮らす土地（「武家地」）は、幕府普請奉行の職掌で、売買は禁止されていました。でも尾張藩が支払った「御手当金」の記録から、実態としては、売買に近い形での屋敷替えが行われていたことがわかります。

尾張藩は添地拝領の際、幕府普請奉行関係者に対して、さまざまな接待を重ねます。幕府の役人が来藩する度、茶・多葉粉、菓子を用意し、食事も、役職の高い順に何段階かにわけて、町料理（仕出し料理）を頼んでいます。また、金銭や品物の手授も頻繁に行われています。こうした接待の場や、藩士の待機所に使用された仮設の建物が、図に示した「御馳走所」です。設置場所は、もとの屋敷地の西北隅の車力門付近です。内部は、小障子や幕で仕切られ、屏風なども立てられています。



御添地請取之節　五段御物見下御馳走所補理方
『市買御添地御拝領向屋鋪御上ケ地大草御屋鋪御上ケ地一件留』（名古屋市蓬左文庫所蔵）より作成

添地拝領に伴って設置された臨時の施設は他に、幕や縄を張って仕切った職人や日雇い（「日用」）の労働者用の多葉粉呑所などがあります。これら簡便な施設は、発掘調査において確認することは難しいものといえます。

また、当時の土地区画指標（「傍示杭」）の規格は、長さ一間（1.818m）、幅五寸二分四方（15.75cm）の檜丸太製の杭をわずか二尺五六寸（凡そ76cm）程打込むものです。添地三万坪に、七本立てられています。

今回は、尾張藩上屋敷跡遺跡の文献調査の成果を一部紹介しました。

大塚分室（村田香澄）

保存科学室こぼれ話（十四）

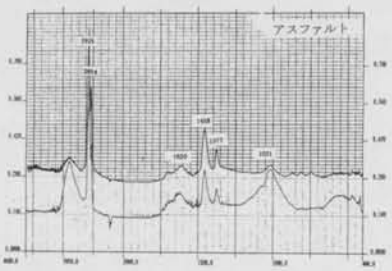
出土遺物にみられる黒色物質について(4)

尾張藩上屋敷跡の調査では、34地点S109の石垣の下からアスファルト状物質（図1）と第4地点91-4L-1号遺構から土壁状の遺物が出土しています（図2）。

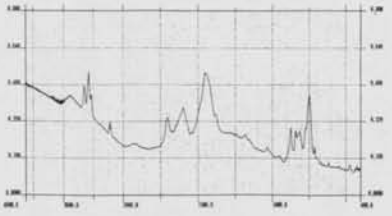
この土壁状物質は、表面に2～5mmの黒色物質が塗られ、内側に漆喰の層、さらに内側が荒い砂を含む層で構成されています。この2種類の試料を、FT-IR法で測定すると、図1の試料は、図3の基準アスファルトの波形と一致しました。しかし、図2の黒色物質は、漆喰と数種類の物質が混合されているためか、図4のように混合波形が得られ、基準物質との比較が難しいことがわかりました。次回は、この混合物質の解明方法を紹介します。（門倉武夫）

第1図　第34地点S109出土の黒色物質

第2図　第4地点91-4L-1号土坑出土の土壁物質（断面）



第3図　基準アスファルト波形（上）と第1図の黒色物質



第4図　第2図の黒色物質にみられる混合波形

文化財講演会

今年度の講演会は展示テーマ「むかし人の風景」に合わせ、旧石器時代から近・現代までの人々に関連した内容で、少しでも当時の人々の生活が感じられる講演を企画しました。

第一回は、7月8日（土）慶応義塾大学教授の阿部祥人氏による「石器が語る東日本の人々」の講演と、「旧石器時代の狩人たち」を上映しました。参加者は113名でした。

第二回は、9月13日（水）都教育庁文化課学芸員の安孫子昭二氏による「土偶からみた縄文集団」の講演と映画「諏訪のおんばしら」を上映しました。参加者は161名でした。

第三回は、10月8日（土）目黒区美術館学芸員の降旗千賀子氏による「おしゃれな縄文人ーむかしの人が使った色」の講演と映画「彩色の歴史」を上映しました。参加者は121名でした。

縄文土器作り教室

8月17日（木）18日（金）土器製作、9月9日（土）野焼きという、全3日間の行事です。

親子23組、一般59名の多数の応募者中から、抽選の結果、12組の親子を含めて44名の参加者で行われました。

野焼きの前日までは小雨の降り続く日々でしたが、当日は時々晴の日で、見事に土器が焼き上がりました。参加者は、見学者を含め、62名でした。土器作りの様子は、「東京時間」でも一部紹介されています。

汐留遺跡の現地説明会

10月8日（日）に行われた現地説明会では、仙台藩伊達家上屋敷の船入り場の変遷を、ご覧いただきました。熱心な見学者は1200名を数えました。（巻頭写真）

多摩ニュータウンNo.72遺跡の現地説明会

多摩ニュータウンNo.72遺跡の現地説明会は9月20日(水)に行いました。

今年度は、第8次調査で、新たに発見された住居跡は40軒、総数では274軒になり、全国的ににも大規模な集落として有名です。

当日は、残暑厳しい中でしたが、121名の見学者がありました。

No.72遺跡現地説明会の様子

創立二十周年記念 巨大土器の野焼き！

11月18日（土）9時～16時

埋蔵文化財センター創立二十周年を記念した行事として、巨大縄文土器の野焼きを行います。

加曽利E式深鉢形土器　勝坂式深鉢形土器

この土器は、製作にかかる日数約60日、高さ1m、重さ50kgの縄文土器2個です。巨大土器の焼成は未経験ですが、担当者一同知恵を絞ってチャレンジします。

本焼きは、午後1時頃からになると思います。

どうぞ、見学にお越しください。

焼き上がった土器は、モニュメントとして、センター正面入口及び、復元住居脇に設置予定です。

安全標語

全国安全週間、第17回東京都埋蔵文化財センター安全の日（7月3日）に安全標語を募集しました。

今年は第1席に藤原恵美子氏の作品が選ばれました。

「お疲れさま」
笑顔でいえる毎日に

また、大森保健福祉センター所長清水裕幸氏による「現代社会を健康で生き抜くために」の講演を行いました。

分室の開設

7月以降、新規の分室です。

武蔵台西分室　千葉基次係長、川島雅人、大西雅也

関町分室南　比田井民子係長、長佐古真也、栗城譲一

関町分室北　比田井民子係長、小松眞名

内藤町分室　千葉基次係長、松崎元樹、石橋峯幸

人のうごき

8月1日付けで、桐山靖彦総務課長が多摩図書館に転出し、後任に小金井工業高校から太田寛が着任しました。

R100

古紙100％配合の再生紙を使用しています。